

はじめに

「おや？どうしたんですか？」

「元気がないようですが、何か悩みごとでも？」

「よかったら、話してみませんか？」

「少しは力になれるかもしれませんよ」

「さあ、いったい何があったんです？」

特別、思い悩むほどではなくても、誰かに話を聞いてもらいたい、自分のことを判って欲しいという気持ちは、誰にでもあるものです。とりわけ、胸の奥深くに、人に言えない悩みや苦しみを抱え込んでいるとすれば、なおさらでしょう。

そんなとき、自分のすべてを受け入れ、温かく包み込んでくれるような人が身近にい

てくれたらと、思ったことはありませんか？

最近、自分の居場所がないという中年男性の嘆きをよく耳にします。仕事、仕事と分単位の生活に追い捲まきられながら、ようやく念願の一国一城の主となったはずなのに、その家庭に居づらいというのですから、いったい何のために働いているのだらうと思わずにはいられません。「これも人生」と諦めてしまっているものでしょうか？

もちろん、人間関係の煩わしさや日常生活に忙殺され、身も心も疲れ果てているのは、何も父親に限ったことではないようです。年代や性別を問わず、疲れた表情の人が、近頃特に目につきます。

「今、この本を手になされている、そう、あなたの場合はどうでしょう？」

「自分の居場所を、本当に魂の休まる時間をお持ちですか？」

疲れを癒すために、郊外の自然林や見知らぬ街角を訪ね歩いて、あるいは趣味やスポーツに興じて、何か満たされないという思いを断ち切れない人は多いはず。なぜなら、ストレス解消では一時的に嫌なことを忘れたり、また肉体的な疲労を癒すことはできても、心の問題の根本に行き着くことは、到底できないからです。

では、なぜ満たされないのでしょうか。そしてどうすれば、満たされるのでしょうか？

人間誰しも、自分が困ったときには、人の優しさに自然に手が合わさるような気持ちになります。生きていてよかった、人生もまんざら捨てたものじゃないと、しみじみと感じるのは、案外こんなときではないでしょうか。また、周囲の気持ちを大切に考える人は、いつの日かそれがめぐりめぐって、再び周囲から温かい協力を得ることができるようです。

要は、してもらおう、与えてもらおうという次元の低い意識ではなく、人のために知恵を生み出し、それを与える喜びを知ること。そして、その結果として、相手の喜びが自分の喜びとなって帰ってくる、私はそこにしか真の満足が得られる生き方はないと確信しています。

日頃、何気なく生活しているようですが、実は私たちは、たくさんの有形無形の恩恵を受けて、生きています。あらためて、その『恩』とは何かを知り、それにどう報いていくべきか。こうした観点からこのシリーズ第3便をまとめてみました。

本書をご覧になり、もし、私の考えにご賛同いただけるのなら、ぜひ一緒に少しでも住みよい世の中にしていきましよう。

将来ある子供たちのために、そして、今を生きるあなた自身のために。

牛尾 日秀

生きて生かせ ● 目次

はじめに 9

第一章 父の残り香

17

- 菩提樹の種 18 お父さんの居場所 27 父の出家 31 謹慎処分 36
本心 45 接ぎ木の運命 48 マンハッタンの乞食 53 離別 63
王道を歩む 67

第二章 母のぬくもり

71

- 無償の愛 72 母の十徳^{じゅつとく} 76 祖先の息吹 94 老人の悲歌 97

第三章 人の世に生きる

食事憲法 102

こくのある人生 107

寄せ木細工 110

性格の不一致に乾杯 114

第四章 為政者の視点

矜持きやうじを正せ 118

国際社会との調和 125

実感する日本の平和

128 117

第五章 慈光に包まれて

御仏みほとけへの恋慕 134

ある尼僧の生涯 141

133

101

第六章 真理開悟の法

151

神と法則 152 精神工学 154 心の宇宙創造 158

循環と調和の法 165

第七章 新世紀への警鐘

169

自由の大洪水 170 没落の歴史より学ぶ 174 仏教の世界観 183

理想社会の創造 189

あとがき 199

表紙カバー・グラビア絵 林ひさえ

第一章 父の残り香
く父母の恩よりく

菩提樹の種

周囲のことなどまったく考えずに突っ走った若い時代から、現実の重みの中でいつの間にか老けこんでしまった自分に気づいたことはありませんか？

「アルハンブラの思い出」という名曲があります。私はなぜかこの曲を聞くたびに過ぎ去った数々の思い出がよみがえり、世の無常を感じさせられます。そしていつも「人生に帰る路はないのだ」と、緩^{ゆる}みがちな自分自身を叱^{しつ}咤^たするのです。

仏教を研究し、有縁の人びとの幸せを希^{ねが}い、ともに解決の道を探りながら教えを説いても、濁流のような現実社会は、次から次へと容赦なく人びとの心に襲いかかってきま

す。そんなとき、自分の非力さに唇をかむことがあります。たとえ社会がどうであろうとも、濁りに染まらず生きる勇氣と根性を人びとに与える説法者となることは、とても難しいことです。

失ってはならない大切な人間としての心を、遠い彼方へ押し流してしまふ大きな魔力を秘めた現代社会であったとしても、それを解決するのはやはり人間自身であり、宗教の力なのです。

いま、先進諸国では家庭の崩壊という憂うべき現象が年々増加しており、わが国も例外ではありません。人間らしい心を育むべき家族が分裂するという悲しい現実、これから世の中はどうなっていくのでしょうか。

つい最近、ある父親が寺の門をたたいて来ました。悩みは親子断絶の問題でした。中学二年の息子が自分を毛嫌いするようになったのです。「てめえのツラなど見たかねえよ」「クソ親父、いつか殺^やってやるからな」。ここに、二年の間に、こうした暴言が増えてきて、いっそのこと殺してやりたいと思う自分をどう押さえればいいかわからないということでした。

その原因は、父親の生活態度にありました。自分は好き勝手な行動をするくせに、口

うるさく暴言を吐く。どうやらそうした不満がしだいに息子の言動を粗暴にさせてしまったようです。父親自身もそのことに気づいて反省しているようでしたが、もはやどうにもならない状態のようでした。

しかし、一般的にこうした問題は親だけの悩みとは限りません。子供自身の心の奥にも親以上に深い悩みが潜んでいます。そのことを理解しなければ、永遠に問題は解決しません。

また、どんなに理屈で教えようとも、素直に心が動かないから厄介です。自分が悪いと、頭では判っているのに、肝心の心がなかなか言うことを聞かない。要は、どうすればやる気を起こさせる説得力を持つかということになります。

法華経では、これを「情存妙法」と教えています。情に訴えることで心の変化を促すのです。理屈の話は「説教」であり、やる気が起こる話を「説法」と言います。

最近、ボーダーレス社会と言われ、男性と女性、親と子、先生と生徒などの差がなくなる傾向にあります。いまでは、「らしさ」ということを強調すれば、差別とか人権無視とかいう言葉が返ってくる世の中に変貌しつつあるようです。

時代によって物事の価値観が変化するのはやむを得ないことでしょう。しかし、それでも親は子供にとって人生の先輩であり、同じレベルではないはず。人権は平等であっても、社会経験や生活の知恵においては、子供の及ぶところではありません。

自然に目をやれば、草木は花を咲かせ、実をつけ、やがて種を落とします。この種の中には、厳しい自然を生き抜くための知恵という財産が蓄えられています。人間の社会もこれと同じようなものではないでしょうか。

人間は、子供から成長してやがて親となり、人生で得た知恵を子供に託そうとします。一方子供はその慈しみに報いようとしています。これが理想的な親子の姿でしょう。

家庭には、そうしたお互いに対する尊敬と信頼の気持ちが必要ならなりませんし、愛情のこもった対話が何よりも必要と思われれます。しかし、残念ながら忙しい時の流れに埋没して、それに慣らされてしまい、大切なものを見失ってしまっています。そして誤解が対立を生み、悲哀を招いているのです。

いま、「恩」ということを言えば、あまり歓迎されない風潮にあると思いますが、これが失われれば、さぞや人生は空しく、社会は殺伐とした砂漠のような世界になること

でしょう。「恩」という字は「因」と「心」という文字から成り立っています。「因」というのは、仏教では「如是因によせいん」と言いますが、そのものを構成している本質という意味です。

では、親の恩とは何でしょうか。それは、親にならなければわからないことかもしれないかもしれませんが、一言で言えば、無償の心情といえます。たとえどんなに裏切られ、冷たい仕打ちに遇あおうとも、わが子を信じ、ただひたすら幸せを祈り続けるという切ない愛情です。

私の寺の境内には菩提樹があります。この菩提樹をよく観察すると、親子の愛情の深さがしみじみと偲おもげられます。まず葉が落ち、それから種が落ちます。種はコロコロと葉の下に隠れ、葉は種のお布団代わりになるのです。こうして、か弱い種は寒い冬を暖かく過ごすことができるのです。動物のようにわが子を抱くことのできない草木の、精一杯の情愛ではないでしょうか。

ところが最近、親の恩というものがあまり通じなくなってきました。昔から「親の心、子知らず」と言われますが、年の端もいかないう子供ならいざ知らず、いい年になってもまだ親の気持ちが変わらない人もたくさんいるようです。

一昨年の暮れの出来事ですが、こういう話を耳にしました。

Kさんは八十歳になる女性で、私の寺の執事長を勤めているお上人さまの母上にあたります。Kさんは、かかり子であるお上人さまの家と一緒に生活をしていましたが、そのころは高血圧のために入院加療中でした。

ちょうど年の瀬も押しつまっていたので、Kさんは病院から休暇を頂いて、自宅に帰ることになりました。わが家に帰ることを心から楽しみにしていたので、待ち遠しくてたまらず、早くから帰る支度をしていました。

ところが、帰宅する前夜、隣のベッドから悲しそうにすすり泣く声が聞こえてきました。日頃、親しくしているAさんの泣き声のようでした。

Kさんは「どうしたの、具合でも悪いの？」と声をかけました。

理由を聞くと、息子夫婦に正月は病院で迎えろと言われたことが原因でした。忙しいとか、家が狭いとか、いろいろ理屈をつけては、病院にとどまるように、嫁が息子をそのかしているようだというのです。

「かわいそうに、正月ぐらい気持ちよく自宅で迎えさせてあげればいいのに。親をなんと思っているのかしら」

Kさんは、出家した子が自分を大切にしてくれることに感謝しながら、車の中でしみじみとした面持ちで手を合わせました。

世の中に子のない夫婦はいるかもしれませんが、親のない子は一人たりともいません。もちろん、生き別れや死に別れで、生まれつき親の顔を知らない子供はいるでしょう。それでも親あればこそ生を享け、祈りにも似た尊い願いに支えられて成長してきたはずです。

幕末のとき、「松下村塾」を主宰した吉田松陰は「親思う心に勝る親心」という名言を残しましたが、子が親を思うよりもお、親が子を思う気持ちの方が強いものです。しかし、残念ながら子供には親の気持ちが変わりません。自分が子供を育ててみて、あるいは親と死別したあとで偲ばれるものかもしれませんが、それがわかる年齢に達していないながらも自分の親に対する感謝の言葉はなかなか出ないものです。

『慈父の恩の高きことは山王の如く、
悲母の恩の深きことは大海の如し』

これは、「心地観経」という経文の一説です。

父親は、子供が社会に出たとき困らないようにという気持ちから、いろいろなことを教えます。子供はそうした知識を積み重ね、次第に社会的人間に成長していきます。一方、母親は心を深く観察しながら情操豊かに育てようとします。これが「山」と「海」に譬えられている所以です。

しかし、最近の子供たちにとって、父親はますます遠い存在になりつつあるようです。あまり話をしないという子供が増えてきました。父親が遠慮しているのか、子供が敬遠しているのか、それとも父親の仕事が忙しいからか、はたまた断絶から起こる拒否なのか、いずれにしても寒心に堪えないことです。

もちろん、女性の社会進出が多くなり、母親の方も子供と対話する時間が少なくなってきたようです。しかし、それでもまだ母親は父親以上に身近な存在です。

たしかに、中には自分たちの都合で子供を捨てて逃げる父親や母親もいます。施設に預けられた子供たちの心情を察すれば、こちらが腹立たしくなることさえあります。また、心底両親を憎んでいる子供や、本当に自分のことを忘れたのだろうか、まだその悲しい現実を信じられない子供もいるようです。

しかし、ほとんどの母親は、たとえ離婚しても自分の子供だけは手放さないものです。そこまで非情になれる母親というのは、よほどの事情があるか、生来母性愛に乏しい女性でしょう。

こうした現象を見るまでもなく、一般的に母親は父親以上に子供に対して深い愛情を持っているようです。それだけに溺愛するのも母親の方が多いように見受けますが、子供にとって母親は父親以上に安心できる存在と言えるでしょう。

私にも三人の子供がいますが、ちょっと母親の姿が見えなくなると、「おかあさんは？」と悲しい顔をします。目の前に父親がいるのに、どうしてそんなに母親が恋しいのだろうかと首をかしげたくりますが、やはり不安なのでしょう。

お父さんの居場所

最近の若い男性の中には、仕事よりも家庭を選ぶという考え方の人が増えてきましたから、父親に対する子供のイメージも多少は変化してきましたが、少し前の世代までは、仕事を優先する人が圧倒的でした。

さだまさしの「関白宣言」という歌の一節に「仕事もできない男に、家庭を守るはずなどない」というのがありますが、最近では「家庭も守れない男に、仕事ができるはずなどない」というように価値感が逆転してきたのかもしれない。

しかし、時代は変わろうとも、父親が子供に対して願っていることは、社会性豊かな

人に育ててもらいたいということ。それは自分が社会の厳しさを身を以て体験しているからです。言い換えれば、父親というものはそのフィルターを通した教育しかできないのかもしれない。

ですから、子供の生活態度が目にも余り、これでは社会に通用しないという^{きぐ}危惧の念が起これば、単刀直入に言ってしまうこともあります。そのために子供の神経を逆なですることもあります。しかし、それも愛情表現の一つなのです。

一方、何も言わない父親もいます。そういう父親に対して子供は、良いときは良い、悪いときは悪いと、はっきり言ってほしいという気持ちを抱いているものです。そのタイミングをはずしてはいけません。

そのとき、どんなに反発されようとも、自分が正しいと思うことははっきり伝えなければなりません。いまわからなくても、いつかわかる 때가くる、そういう気構えが大切だと思います。ちよっぴりさみしい役回りかもしれませんが、私はそこに父親の尊厳があると信じています。

ただ、そのときに肝心なことは、子供の前で母親が父親の教育について口出しをしないことです。口論するなど論外です。どちらが正しいのか子供は迷ってしまい、ただで

さえ希薄な父親の尊厳がますます地に落ちてしまいました。

先日、ある会議の合間、現代は父親の受難の時代だと話し合っている人がいました。以下は、その対話の概略です。

「特に六十代、七十代の父親は一番損をしていると思いますね……」

「どうして？」

「戦争で青春を奪われ、父親からは厳しく育てられ、経済成長のための戦士となって働き、ようやく仕事から解放されたかと思うと、今度は妻や子供から疎まれ、寂しい晩年を送る人が多すぎますよ」

「いや、中間管理職の立場にある四十代、五十代の男性も大変だよ。このところ心身症にかかる人がぐっと増えたらしいよ」

「そう言えば、上司からはうるさく言われ、部下からは突き上げられる、唯一のオアシスである家庭に帰ると疎まれるという同僚がいます。妻と子供の会話に口をはさむと、しらけムードになり、最後には誰もいなくなってしまうのだそうです」

「かわいそうにね。都会のサラリーマンの中には家で奥さんから愚痴や怒りなどをぶつけられ、居り場がない男性が多いらしいよ。そこで帰宅拒否症という精神病にかかっ

て…」

「家に帰らないで、どうするんですかね？」

「まあ、飲んで遅く帰るか、カプセルクリニクに行くかだろうね」

「カプセルクリニクって何ですか？」

「病院にカプセルが用意されていて、そこに入るらしいよ。その中は静かな音楽などが流れていて心が落ち着くそうだよ。周囲にまったく気遣う必要のない世界で、しばしの精神的安定を得るといっわけだ」

「大変ですね。きっと極限の状態なんでしょうね」

「週休二日制と言えば、聞こえがいいけど、その反面ノルマが課せられ、仕事の密度が濃くなったよね。大企業の間管理職の平均寿命は四十八歳と言うよ。みんな成人病。そういうハードな仕事をしているにもかかわらず、家庭で疎まれる存在であれば、いたい何のために生きているかわからないよ」

「大なり小なり、そういう気持ちを抱いている男性は案外多いんじゃないでしょうかね。そう言えば、父親の権威がなくなったのは、給料が銀行振り込み式になったからだという人がいましたよ。なぜかと言えば、それまで給料袋を妻に手渡しているときまで

は、一家の担い手としての存在感があったけれど、振り込みになってそれがなくなったというのです。そんなものでしょうか」

はたして父親の居場所はどこに消えてしまったのでしょうか。しかし、その原因は女性のパワーが強くなったからというよりも、自分の仕事や生き方に対する自信と誇りにあふれた男性が減少したからだと思います。

一家の担い手が、どうして小さくなっていく必要がありますか。堂々としていればいいのです。「お父さん、がんばれ！」と、声を大にして声援したい気持ちです。

父の出家

私の父は六十三歳で亡くなりました。人生八十年の時世からすれば短命の方です。父は商家の長男として生まれましたが、太平洋戦争に志願して九死に一生を得て復員し、自分で商売をしていました。

しかし、祖父母が神仏に願をかけて生まれた子であったためか、出家してお坊さんに

なりました。仏縁が深かったのでしょう。

出家のいきさつは、檀家寺の住職との不仲にありました。父は、本来、僧侶とは神仏のお手伝いをして人びとを幸せに導くものであると考えていたようで、言われのない言いがかりを受け、「それなら自分が本物の僧侶になってみせる」と決意したらしいのです。

当時は終戦まもないころで、人びとの生活は本当に貧しいものでした。とりわけ自分のお寺を持たないお坊さんの生活はひどいものでした。

私が子供のころ「橋の下の禅門」と呼ばれるお坊さんがやって来て、あじろ傘に破れ衣の姿で、家々の玄関先に立ち、分厚い経典をアコーデオンのように操りながら経文を読み、最後にお布施を頂いて早々と帰っていました。

父はそういう行為が嫌いでしたから、出家をするなど想像もつかないことでしたが、やはり宿世の因縁だったのだと思います。

父は母と結婚した翌年に出家しました。結婚する前、母は近くの神社に縁談についてお尋ねに行ったようです。

すると神主は、「この人はいずれ大成して光り輝く人間になるから嫁ぎなさい」との

返事。そこで期待して結婚に踏みきったようですが、まさか出家するとは思ってもよらなかったようです。そのとき私は生後八か月でした。

その後、父は仏勅ぶつちよくを受けて「無辺むへん行ぎやう」と名乗り、法華經を研鑽けんざんして教義を立て、ついに一宗を起しました。父が口癖のように言っていたことは「このままでは人類は滅びてしまうから、本当の仏教を広めなければならぬ」ということでした。

自分の宿命を悟ってからというものは、ひたすらお釈迦さまを信じて、脇目も振らず法華經の研究に没頭しました。満足しなければ食事に箸をつけないこともありました。それは「食べる資格がない」という気持ちから起こったものでした。

父は求法するときの気分を何よりも重んじたために時間を超越していました。ご飯だとか、寝る時間だとか言われれば、気分が変わって修行にならないといつも洩はらしていました。父にとっては自宅の六帖の間がインドであり、釈尊の悟りを追求する唯一ほの菩提だいじゆけ樹下じゆげでした。

万事そのような具合ですから、母も修行中の父にはうっかりとものが言えず、私の妹を仲介役として使っていました。妹も父を氣遣い、おそろおそろ歩み寄っては小声で耳打ちし、母の用向きを伝えていました。さすがに幼い娘には弱いのか苦笑いしながら、

父もこれに応じていたようです。

父は不思議な力を持っていました。何でもよく的中させるのです。人びとは、その不可思議に驚いて、「千里眼」とか「神通力」などとはやしたてながら集まって来ました。しかし、父はそういう人たちによく言い聞かせていました。

「ファンなどいらない。教えに惚れる！」

父の説法は長いのが常でした。あるとき、宇宙の真理観や心の世界など経文を片手にまる二日、寝食を忘れて説法を続けたことがありました。お弟子さんが理解するまでいろいろな角度から話をしていたようですが、一方聞く側にとっては大変なことでした。体調がおかしくなるのです。もちろん、そのような不規則な生活を忠告するお弟子さんもいました。

しかし、「わしが説法するときには生理がとまる。便所や食事など忘れてしまうんだ。それが健康に良くないことくらい百も承知だ。わしが無理をせんでもいいように早くお前たちが、わしの手伝いができるようになれ！」と一喝されるのがおちでしたから、そういう忠告は次第に禁句となっていくたようです。

父はお弟子さんには厳しい躰をしました。教義はもちろん、お経の唱え方から歩き方

や食事の作法にいたるまで厳しいものがありました。お坊さんらしさをしっかり植えつけようとしたのです。

ただ、信者には和顔を絶やさず相談に応じていました。父が布教に入ると、あたかも慈父を慕うように信者が周囲に集まって来ました。それが終わるとお弟子さんの指導があり、最後が自分の修行時間でした。「いま、お釈迦さまがこの世におられるなら何をなさるだろうか」と、空が白むまで求道する毎日でした。

年を経るごとに、お弟子さんが増え、あちこちにお寺ができて、父はますます布教に出かける機会が多くなりました。

当然、家族が父と言葉を交わすことも少なくなっていました。たまに一緒に食事をするとときでさえも、片時も仕事のことから頭を休めることはありませんでした。無言の食事、その沈黙の時間帯が私にとっては一歩苦痛でしたから、できるだけ早く食事を済ませ、自分の部屋にこもっていました。

父の積尊に対するほとばしるような信仰の情熱と使命感は、日増しに強くなっていきましたが、わが道に行く父の姿と苦しい生計を支えながら子供を育てる母の姿を比較するにつけ、家族を捨てて他人を助けるのは偽善だと思うようになりました。

やがて、親戚のほとんどが父のことを「信仰気がいい」という偏見の眼で見られるようになりまして。しかし、父は「信仰気がいいと言われるようになった。やっと一人前になった」と逆に喜んでいたほどです。

謹慎処分

中学生のころの私は、ちょっとしたことでも腹が立つと、場所もわきまえないで喧嘩をすることがありました。あれは中学二年のときだったでしょうか、ある事件を起こしました。

家から学校までは四キロの距離がありましたから、部活の関係で帰宅時間が遅くなることが多かったので、自転車で通学しようと思いを固めました。当時は自転車通学にはペーパーテストと実技があり、一回でパスすることができました。

しかし、私の自転車は古くて黒く大きな自転車でした。友達は流行の型なのに、どうして私だけが戦後間もなく作られたような時代遅れの自転車に乗らなければならないの